

全科協

vol.50 *News*
NO.1

2020年1月1日発行 通巻第290号

特集

博物館の人を育てる

CONTENTS

- P2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 1月2月の特別展等
- P14 ▶ リニューアル情報
- P15 ▶ トピックス

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
<http://jcs.jp>

博物館の人を育てる

博物館、科学館に勤務する人の多くは学芸員の資格を持っている。しかし、大学の養成課程や試験で学芸員の資格を取っても、その内容は概略的なものであるなど実践とはほど遠い。一口に「学芸員」といっても分野や館の種類、置かれている環境などによって実際の仕事はさまざまである。また、大学で博物館学を学んでいなかったり、専門分野以外の担当に配属されたりする場合もあるだろう。

「科学系博物館」は自然史や科学技術から動植物園、水族館、プラネタリウム、体験を通じた教育中心の施設（科学センター）などさまざまである。また、指定管理や非常勤といった立場で働く人も多く、数年で人が入れ替わることも多い。

そうしたなかで、博物館で働く専門的な人材を育てるために、各施設でOJTによって育成するほか、各専門分野の組織（日本プラネタリウム協議会など）や地域の博物館協会などで研修を行っているところもある。

そうした、博物館職員になってからの研修（人材育成）についてさまざまな立場から紹介してもらい、その現状と課題を共有することにしたい。

（編集委員 弘田 澄人）

日常業務こそが最大の研修の場である

はまぎんこども宇宙科学館 甲谷 保和

1. はまぎんこども宇宙科学館は人気絶好調！

はまぎんこども宇宙科学館（横浜こども科学館）は、横浜の中心地域から鉄道を利用し30分程度の距離にある、宇宙をテーマにした体験型科学館である。

1984年の開館以来35年が経過し、建物にも展示にも古さが目立つ部分はあるが、2018年度の年間来館者数は35万人を超え、開館以来最多の来館者数を記録した。

大規模なリニューアルや展示更新がない中で人気を高めている理由として、適切な声かけや解説の充実で既存の展示を生かしつつ、工作、実験、プログラミングなど多彩な教室や特別展の実施による、既存の枠組みに捕られないモノからヒトへの転換がある。

2. ふつうの人から科学館の人に！

当館では、受付、券売、展示室での案内、安全管理などに携わる運営課スタッフ17名、展示解説ほか各種事業の実施・企画、機器メンテナンスなどに携わる事業課スタッフ17名、広報2名、庶務・経理3名、学術顧問および管理職9名の約50人体制で科学館の運営を行っている。

各スタッフは新卒採用あり、さまざまな経歴をもつ中途採用ありで、それぞれの立場から科学館業務に取り組んでいる。

事業系スタッフとして新卒採用から4年目を迎えた中堅スタッフは、着任当初の課題として展示解説での「声

かけの難しさ」、ショーなどの「演示の緊張」を上げている。

展示室で来館者つまりお客さまに接する場面では、科学館も接客業であり、知識を充実させるサービス業である。接客・接遇のための研修やマニュアルは当然のこととして「おもてなしの心」「お客さまが不快に感じないための配慮」「日ごろからさまざまな状況（クレーム、ケガ、災害なども）を想定すること」など、意識すべき点は販売店や飲食店と変わらない。

加えて、科学に対するお客さまの興味・関心もそれぞれに異なる。

先輩のアドバイスを試し、関心が高そうなキーワードを意識するなど、声かけも演示もそれぞれの反応を確かめながら、修正し、挑戦の繰り返しとなる。

これは、いわゆるPDCAサイクルに類するものだが、失敗と成功に向き合い、修正し挑戦し続ける意欲を保てるよう、周囲のサポートは欠かせない。

経験の蓄積とともに、視野が広がり、多くのお客さまの顔が見え、それぞれの興味や関心、疑問、つまりニーズを読み取りながら対応ができるようになれば、大きな成長の一步といえる。

そして、視野が広がるからこそ、新たな課題が見えてくる。

「参加する子どもの満足度だけでなく、同行する保護者も興味を持てる配慮」「楽しさと学びの両立」「興味を

さらに発展させる工夫」など取り組む課題は尽きない。

用意された仕事を実施する段階から、お客さまから読み取ったニーズをもとに新たな教室などの企画や計画に取り組み自ら仕事を創造する段階へと進む頃には、館内でも中心的なスタッフへと成長している。

3. 名選手必ずしも名監督ならず

ここで、指導役たる上役の資質についても触れておきたい。

科学館という職場では、専門性の高い職種ほどその職を望んで着任した人が多く、中には生涯現場での職務を望む人もあるだろう。その中で、おもしろ企画の達人や実験ショーの名人として経験を蓄積してきた人が、その実績を評価されて昇進し指導的な立場や管理職へと進む場合、蓄積した経験について一定の尊敬を集めつつも、管理業務や指導者として、一から学ばなくてはならないことも多く立場の変化に戸惑う例が少なくないように思う。

他者に仕事を任せるのにも勇気がいるものだし、理想とするレベルに仕上がらないこともある。「自分でやれば、もっとうまくできる」と思ってしまえば、ますます任せにくくなるだろう。

事業系スタッフを統括する事業課長は、過去に複数の科学館の勤務を経験しているが、当館に着任するにあたり「自身の考えをより大きく適用できるように、役職につきたいと考えていた」と語っている。

スタッフを育成する上役の側には、自身の想いを形にするだけにとどまらず、部下のスタッフが思い通りに動ける環境を整え、部下を育成し、業務を差配することで、より大きく成果をあげるという意識が求められるだろう。

一方で、若手スタッフほど安心を求め、思いを実現できる環境を用意するだけでは「こうしたい」という思いを発露させるには至らない傾向にある。

楽しさと学びを両立する科学館として「自分がおもしろく、他の人をおもしろがらせよう！」という意識を高め、いかにコンフォートゾーンからラーニングゾーンへと誘いだし、時にはパニックゾーンを体験させるなど、意欲を高め経験を深めさせる手法の拡充は、指導する側の課題となっている。

4. 日常業務こそが最大の研修の場である

当館の標準的な勤務形態は、1日7.5時間、月20日勤務となっている。年間およそ1,800時間の勤務時間を過ごしている。

これまでと同じやり方だから大丈夫と思考停止することなく、常に現状否定の精神をもって改善と挑戦を意識することができれば、日常業務の時間は膨大な研修時間となる。

当館館長の言葉に「少しの貧乏を推進力に」という言葉がある。

新しい展示を導入する資金がない、有為なスタッフを雇い入れる資金がないと、不足を嘆くばかりでは、現状の改善は望めない。

人それぞれに立場や雇用条件があり、働いている理由もさまざまであるが、新しいことや大変だと思うことでも、前向きな姿勢で取り組める意識が大切だろう。

今あるものを見つめて、スタッフからの現場の意見と上役による環境の整備を両輪とし、日常業務の中で成長を重ねることができれば、館全体で大きな飛躍を期待できるだろう。

静岡科学館における博物館・科学館職員を対象とした研修交流会

静岡科学館る・くる 藪 寄 清香

静岡科学館は「市民が自ら体験することを通して身近な科学に親しみ、及び科学への関心を高める場を提供することにより、市民の創造力及び感性の向上に資すること」を目的とし、「みる」「きく」「さわる」をキーワードとした体験型の科学館として、平成16年3月21日に開館した。約50種類の常設展示物を設置しており、展示物の体験を通して、科学のふしぎを発見する喜びや創造する楽しさを来館者が自ら感じられるよう解説などの表示を少なくしている。さらに、当館では「展示物」と「来館者」をつなぐために「科学コミュニケーション」を行い、体験型科学館ならではの形で来館者に科学のおもしろさを伝えている。

一方で、科学館・博物館のおかれている状況は15年

で大きく変化している。かつては「科学体験ができる貴重な場所」として親しまれてきたが、商業施設においても科学系イベントが開催されるなど、人々が科学的な現象に触れる機会が多様化し、博物館・科学館が特別な場所では無くなりつつある。また、少子化の影響も含め、全国的に博物館・科学館へ来館する層の低年齢化が進んでいる傾向がある中、現状の課題として

- 博物館・科学館をただの「遊び場」で終わらせず、「科学体験を通して、科学的なものの見方や考え方を学ぶ場」にするための取り組み
- 理科を学習していない未就学児に、科学的な体験を通して、科学の芽を出す種を持ち帰ってもらうための取り組み

があげられる。

当館が抱える課題は全国の博物館・科学館にも少なからずあると考え、科学コミュニケーションの視点から、これらの課題を解決するため「博物館・科学館若手職員向けグローバル研修交流会」を開催することとした。講座受講生を若手と限定したのは、若手向けの研修会は全国的に少ないためである。さらに、博物館・科学館において、正規雇用の募集が少なく不安定な雇用状況であることから、短い期間で職員の入れ替わりが起きるといった状況も生まれてきており、職員間での知識や経験などの継承を困難にしている。このような現状の課題を解決するためには、若手の育成が必要と考えたためである。

研修交流会の内容を検討するにあたり、2020年の全面実施に向け、改訂された学習指導要領において提言されている「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点」を取り入れることとした。これは、博物館・科学館においても「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」を意識した事業を展開していくことで、商業施設における科学系イベントとの差別化ができ、科学館・博物館が再び特別な場所となるのではないかと考えたからである。また、科学コミュニケーションを取り入れた「科学の芽を出す種」を持ち帰ることができるプログラムとは何かという研修内容とした。

本研修は2日間の日程で実施した。講話を聴くだけでなく、体験を交えたり、プログラムを作成するなど参加者自身が考え、気づきを得るような形態で行った。対象を勤続年数5年未満と限定したのは、同じ土台で活発な意見交換ができるような場にするを意図したからである。

＜研修内容＞

講義①「科学の芽の種を持ちかえる科学工作」(90分)

未就学児とその保護者を対象とした当館事業「めばえのかぐ」の立ち上げの経緯と具体例を紹介する。幼児向けプログラムの作成時のポイントを学び、プログラムの作成を行う。



講義②「疑問を解決することが楽しくなる科学教室」(90分)

小学校中学年から高学年向けの科学教室の実例を紹介する。科学実験を手順通り行うのではなく、疑問を解決するための手順を参加者自らが考えるようにするプログラムを体験する。



講義③「楽しく考えさせるプログラムづくり“ワークショップ・サイエンスショーの事例から”」(300分)

講師自身が科学館などで実施しているサイエンスショーの演示やプログラムを作成する上で大切にしている点を学ぶ。対象年齢や何を伝えたいのかを設定し、知識ではなく思考や学びのプロセスを重視することなどを意識したワークショップのプログラム作成をグループワークとして実施する。



平成30年度からスタートした本研修は、今年度で2回目の実施であるが、こちらが意図する研修の中で伝えたいポイントを参加者が押さえていることがアンケートからも読み取れる。また、アンケートの中で以下の回答が多かった。

- ・他の施設の方と交流ができ、情報交換ができてよかった。
- ・自館ではグループワークのように、1つの企画を複数で考える機会がなかったため良い経験となった。

自館では体験できないことや他館との情報交換から気づかされることも多くあったようで、自館の業務につながることを期待する。外部の研修会へ参加することは多

くのことを得る事ができるが、各館の状況により研修会への参加が難しいところもあると思われる。しかし、このような研修会をきっかけに科学館・博物館がつながることで、各館が抱えている課題を解決する糸口が見つかるのではないだろうか。主体的・対話的で深い学び（ア

クティブラーニング）の手法や科学コミュニケーションの正解はないかもしれないが、その答えを探し続けていくことで科学館・博物館が特別な場所となっていくのではないかと考える。

「日本プラネタリウム協議会」の研修について

日本プラネタリウム協議会 教育担当 白井市文化センター・プラネタリウム 長谷川 好世／伊丹市立こども文化科学館 丸川 章
愛媛県総合科学博物館 小林 真吾／個人会員 太田 しのみ

2006年、3つのプラネタリウム団体が合流し、日本のプラネタリウム唯一の全国的な研究団体として「日本プラネタリウム協議会（Japan Planetarium Association：JPA 以下同）」が誕生しました。現在、JPAの会員数は287（2019年11月1日現在）。プラネタリウム施設の会員だけでなく、プラネタリウムの製造会社や番組制作会社など、プラネタリウムに関わる企業や個人も会員です。2006年以前は、3つの団体がそれぞれ独自に講演会や研修会を行い、会員の資質向上に努めてきました。合流後、『プラネタリウム施設・団体及び個人の交流と連携のもとに、プラネタリウムの進歩発展を図り、豊かな文化の創造、科学教育及び天文普及に寄与することを目的とする』と定め、その実現のために研修を行っています。

プラネタリウムを取り巻く環境は、近年大きく変化しました。機器の進化もさることながら、終身雇用職員の減少、非常勤職員の増加、また、指定管理者制度の導入などで雇用形態が大きく変わり、館によっては職員の入れ替わりが多く、技能が蓄積されにくいことにより、新人や中堅職員の育成について、頭を悩ますところです。JPAでは会員やプラネタリウム業界の底上げを図るため、現在下記の3つの研修を行っています。今回は②と③についての現状や課題を記したいと思います。

- ①全国プラネタリウム大会（以下、全国大会）
講演会と研究発表・実践報告 年1回（2006年度から）
- ②全国プラネタリウム研修会（以下、全国研修会）
年1回（2007年度から）
- ③ワーキンググループ（WG）活動 随時（2007年度から）

全国プラネタリウム研修会

プラネタリウムの現場に立っている担当者が主役の全国研修会は、現在まで12回開催されています（図1参照）。6月に全国大会が開かれるため、全国研修会の開催日程は秋から冬（11月から2月）にかけて、2泊3日（実質丸2日間）です。第1回と第2回はJPA執行部と開催館が運営を行い、第3回目以降は開催館が属する地域ワーキンググループ（地域WG 後述）が中心となり開催してきました。また、近年はJPA教育担当が運営を補佐しています。研修会のテーマは表1に示す通りですが、第2回を除き「初任者講習」は毎回行っています。初任者をメインターゲットに「プラネタリウム解説のための基本」を、丸2日間、じっくり研修することで参加者の知識や技能、モチベーションの向上をはかります。プラネタリウムに関わる人が一堂に会し、交流を深めることで参加者の横のつながりを作る全国研修会は

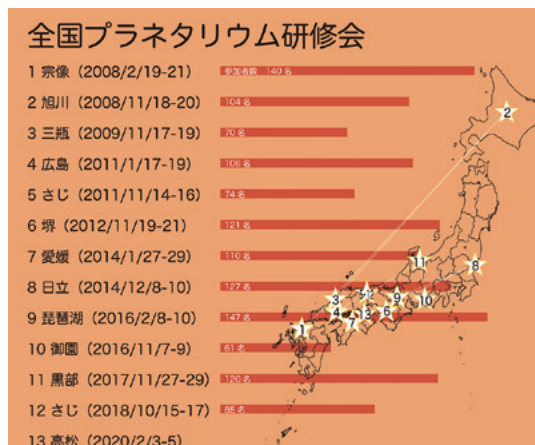


図1 全国プラネタリウム研修会マップ

年度	開催館	運営	テーマ
2006年・8	(JPA 発足初年度、全国研修会は開催していない)		
2007年・9	京博コリックスプラネタリウム	JPA 執行部	—
2008年・20	旭川市科学館サイハル	JPA 執行部	—
2009年・21	愛媛県立三瓶自然館サヒメル	中西国 WG	楽しい研修会！明日からのヒントが満載！
2010年・22	広島市こども文化科学館	中西国 WG	宇宙 de プラネタリウム
2011年・23	鳥取市さじアストロパーク	中西国 WG	原点回帰 星ってキレイ！素直な感性を再び
2012年・24	ソフィア堺プラネタリウム	近畿 WG	伝える 伝わる
2013年・25	愛媛県総合科学博物館	中西国 WG	宇宙を伝えるために
2014年・26	日立シビックセンター大観劇場	関東 WG	ゼロから極めるプラネタリウム
2015年・27	ラフォーレ琵琶湖	近畿 WG	琵琶湖で学ぼう！生解説とイベント撮影 喋って、聞いて、楽しんで
2016年・28	スタ・フォー・レスト御園	東海 WG	DIY (Do it yourself) 自分たちで何でもやろう！ — 企画・運営・コンサートのセッティングまで —
2017年・29	黒部市吉田科学館	北陸 WG	プラネタリウムで読む・伝える・楽しむ
2018年・30	鳥取市さじアストロパーク	中西国 WG	本物を見よう！
2019年・31	高松市こども未来館	中西国 WG	きてんまい！うどんの国のプラネタリウム入学

表1 各年度の全国プラネタリウム研修会

貴重な機会です。研修会運営のため、参加者から参加費の徴収とJPAから開催費が予算計上されています。

ワーキンググループ（WG）活動

WGは地域ワーキンググループと目的別ワーキンググループの2種類があり、JPA発足2年目から活動を開始しました。全国研修会が年1回に対し、WGは年間を通し、継続して研修を行う目的で設置されました。活動費は僅かですが、それぞれのWGに予算計上されており、WGを運営するスタッフの旅費補助などに使われています。

地域ワーキンググループ

全国を8つのエリア（北海道、東北、関東、北陸、東海、近畿、中国・四国、九州・沖縄）に分け、各エリアの会員が自主的に参加者を募り、研修会などを企画運営する活動を行う。現在、東北を除く7WGが活動中。

目的別ワーキンググループ

プラネタリウムを運営するための技術、知識、情報収集など特定の目的のために集まり、活動を行う。目的別WGは設立当初は3つだったが、目的を達成し解散したWG、新たに加わったWGもあり、現在5つのWGが活動中。

【課 題】

1. 運営スタッフ

全国研修会の運営をJPA執行部から地域WGに移行したのは、全国規模の集まり（全国大会と全国研修会）を執行部が年2回行う負担を減らすためです。全国大会は総会もあるため必ず開催しますが、全国研修会は開催

館の立候補がなければ、その年度は開催しない方針になりました。が、途切れることなく現在まで継続している大きな原動力は、「運営スタッフの強い想いと粘り」です。多様化しているプラネタリウムの運営形態の中にあって、全国のプラネタリウム職員のために、一現場職員が研修を行い続けることに周囲の理解が図られるか、課題です。

2. 地域WGによる差

地域WGの運営が確立しているところとそうでないところの差があり、単独館開催では運営が難しいこともあります。JPA教育担当がどのように関わっていくか、課題です。

3. 研修のテーマ設定

2種類のWGの研修テーマが比較的明確なのに対し、全国研修会のテーマを決めるのは難しいことです。全国研修会の参加者は初任者をメインターゲットにしていますが、回数を追うごとに、中堅職員の参加も増えていきます。施設運営形態も担当者の経験値も分散している中でテーマ設定は迷います。今まで一番多く全国研修会を運営した中国・四国地域WGは「自分の館あるいは自分自身が今一番知りたいことや解決したいこと、このような研修会であれば参加したいこと」をテーマにすると提案しています。

プラネタリウム業界の底上げを図るため、今後も研修活動を継続していきます。



全国プラネタリウム研修会 黒部2017



全国プラネタリウム研修会 さじ2018

西日本自然史系博物館ネットワークが行っている研修会について

きしわだ自然資料館 平田 慎一郎

西日本自然史系博物館ネットワークとは

特定非営利活動法人西日本自然史系博物館ネットワーク（以下、西日本ネット）は、博物館で事業を担当している学芸員を中心に活動している組織です。助成事業実施のために組織化された複数館のネットワークを発展させる形でNPO化したもので、平成16（2004）年に発足しました。既存の博物館団体のような加盟館の振興や親睦を目的とするのではなく、自然史系博物館が社会に対しもっと重要な役割を果たすべきという理念のもと、研修会や巡回展を実施したり、サイエンスミュージアムネット（GBIF）に参画したり、東日本大震災の標本レスキューに取り組んだり、博物館に関わる社会的事象への意見表明を行ったりと、数多くの事業・活動に取り組んできました（詳細は佐久間（2012）を参照）。

個人が主体の活動

こうした事業を実際に企画・運営しているのは、基本的には学芸員や関連スタッフなど博物館と関わりのある個人会員です。その活動が所属組織の業務としてオーソライズされているとは限らず、むしろ個々の会員が日常的に交流する中で生まれたさまざまなアイデアや課題解決の意識が、新しい事業を生み出すきっかけになっています。なかでも、百貨グッズの活用や収蔵庫の総合防除と標本管理、樹脂封入・プラスチックネーション標本の作成、展示照明のテクニック、展示リニューアルの検討

など数多くのテーマで実施されてきた研修会やワークショップは、西日本ネットの主要な事業になっています（図1）。

研修会の実施にあたっては、あるテーマを取り上げた会員が具体的な内容を考え、開催日などを決定した後、西日本ネットに対し共催あるいは後援を依頼するという流れで実施されることがほとんどです。担当会員が自分の所属館を会場に自ら講師をするのであれば費用はまったく不要で、外部講師を招くための謝礼や会場代、消耗品などが必要になるときも、経費を参加者で頭割りした額を参加費として徴収しており、西日本ネット本体の予算から支出されることはありません。業務での出席を希望する会員には、西日本ネット名で所属長宛に依頼文書を出すことも可能です。筆者も他館の学芸員と共同で、大判プリンタの効果的な使用方法や展示資材の活用をテーマにした研修会を開催したことがありますので、簡単にそのときの経緯をご紹介します。

研修会の実際

大判プリンタ関連の研修会を実施したのは2011年から2014年にかけてで、この期間に計3回実施しました。多くの学芸員が集まる研修会などの合間に大判プリンタの使用法が話題にのぼり、出力トラブルが多くて取り扱いがむずかしいのであまり有効活用できていないという意見を聞いたことから、比較的使いこなせていた筆者を含む学芸員3名が、共同で研修会を企画することになったのです。担当3名の所属は異なりますが、大阪市内であれば仕事終わりに直接集まれるくらいの距離でしたので、各回とも実施数ヶ月前には一度打ち合わせをし、それ以降はメールのやりとりで内容を調整しながら開催に至りました。会場は3回とも、西日本ネットの事務局であり立地面でも多人数の参加が見込まれる大阪市立自然史博物館に設定しました。内容としては、1回目が初心者向けに大判プリンタの基本的な使用法を、2回目は出力するロール紙などの素材紹介と活用法を、3回目にはのり付きスチレンボードなど展示に使うパネル資材をテーマとし（図2）、2回目、3回目は関連した企業の方に話題提供をしていただきました。各回とも参加者数は20～30名程度で、3回目の終了後にアンケートをとったところ、こうした技術的な研修会を歓迎する声は多く、さらに発展させた内容を希望する意見が寄せられるなどとても好評でした。



図1 西日本自然史系博物館ネットワークのサイトに掲載されている技術講習会情報



図2 2014年12月22日に大阪市立自然史博物館で開催された講習会「のり付ステレンボードを知る!!」のようす

研修会の効果

こうして数多く実施されている西日本ネットの研修会は、単独で職場内の専門的研修を行うことが困難な多くの博物館、とくに筆者が所属しているような小規模館にはとても有益な存在です。少人数で展示や講座などを企画している小規模館の学芸員にとって、他館の学芸員と交流し、新しい知見や技術のことを学び、ときにディスカッションもできる研修会という場は、自らの活動内容を客観的にふり返るよい機会になるからです。文化庁や日本博物館協会などでも研修は行われていますが、開催場所が東京であることが多く、地方の小規模館では旅費の都合でそれほど頻繁には参加できません。また、少人数で館の運営をやりくりしているため、連続して職場を空けにくいという事情もあります。その点、西日本ネットの研修会は、休館になる施設が多い月曜日に開催され

る頻度が高く、会場も京阪神間が中心なので、個人の興味・関心に応じて気軽に参加することができます。一方で、こうした研修会への参加が業務扱いでないことには是非があるでしょうし、参加が個人の意思に任されていることは、同じ職場内での学芸員の意識の違いを顕在化することにもなります。研修で得た知見や技術を職場内で共有することに、ハードルを感じることもあるかもしれません。幸いにも、筆者の所属館では研修会の成果は十分生かされていると思いますが、こうした個人ベースの動きを一般化することには多少課題があると考えます。

活動の今後

これまで15年にわたり活発に活動してきた西日本ネットですが、ここ数年は研修会の開催頻度がやや低下している印象があります。私が担当している大判プリンタ関連の研修会も、担当者の多忙化や所属館の事情などもあり、2014年以降は実施できていません。しかし、近いうちにまた開催しようという機運が担当者間では高まりつつあり、技術の進歩を反映した新しい内容を検討しているところです。未確定な部分が多く、確実な開催時期をお知らせすることができないのですが、実施の際は西日本ネット会員以外でも参加できますので、興味をお持ちの方は同ネットのWebサイト(<http://www.naturemuseum.net/>)を時折チェックしてみてください。

引用文献

佐久間大輔（2012）広域連携組織は博物館発展のパートナーとなり得るかー西日本自然史系博物館ネットワークを例に。博物館研究, 47(9): 10-12.

文化庁エデュケーション研修 ～多様な学び手とのかかわりを考える～

三重県総合博物館 布谷 知夫

文化庁は2009年に全国の博物館で行われている教育事業に関するアンケート調査を行い、その分析から、必要とされているのは教育事業の担い手の養成であるとして、2011年から毎年1回のエデュケーター研修を実施してきた。博物館現場では教育担当者を置いたり、普及教育係を設けたりすることが増えてきているが、その大半は一時的な分担であり、あえて言えば現場経験だけによる博物館教育が行われていた。海外には博物館教育を専門的に学ぶ場があるが、日本にはそうした場はない。五日間の研修で専門家を育てることができるわけではないが、最低限度の経験をしてもらうことで、博物館教育の基礎を知ってもらい、現場での工夫につなげていこうという研修である。

主催が文化庁であるため、参加は美術館・歴史系博物館職員に限られていたが、一昨年から博物館関係の所管が文部科学省から文化庁に移ったため、今年度からすべての館種が参加できるようになった。さらにエデュケーターという職種の養成ではなく、博物館で働くすべての人に対して、多様な学び手を対象とした教育活動の在り方を考える研修とするために、今年度の第9期から、名称をエデュケーション研修と変えた。なお博物館教育とは、講座やワークショップなどに限らず、展示をはじめとする幅広い活動を含んでいる。

この研修は10名からなる企画運営委員会（座長：布谷知夫）がプログラム内容や講師について意見を述べ、講師も務め、また可能な限りすべての研修に参加して、

振り返りを行い、プログラムの改善を行っている。そのため基本的な考え方は初年度から大きな変化はないが、博物館を取り巻く環境の変化などを反映して、講師やプログラムは少しずつ変えている。

実施は毎年9月に三日間、中間課題を課して、翌年2月に二日間の合計五日間であり、定員は50名であるが、毎年申込者が多く、おおよそ55人ほどを受け付けている。人選は文化庁の担当者が行っているが、できるだけ全国各県から広く参加出来るようにしている。申込資格は、互いの議論が行えるよう、現場で教育事業に2年以上かかわっていることだけで、職種や学芸員資格の有無は不問としている。ただし申込用紙に「これまで実施してきた博物館の教育活動」「なぜこの研修を受けたいのか」「この研修で何を学びたいか」などを書きこむことが要求されていて、参加のための準備ができていることを確認する。

今年度のプログラムでは、五日間で事務的な連絡やアンケート記入などの時間が1時間25分（3%）、講義が10本で9時間（19%）、ワールドカフェとディスカッションが4時間15分（9%）、グループワークが22時間30分（47%）、教育プログラムの体験が4時間（8%）、休憩時間と昼食時間を合わせて6時間25分（14%）であった。合計は47時間35分となる。

この時間配分でもわかるように、講義は（写真1）現場では改めて学ぶ機会が少ない教育学やプログラムづくりなどの基本をテーマとして、短時間としている。そして参加者がグループに分かれて、ワークショップをしたり、ディスカッションをして自分たちでプログラムを作り、それを他のメンバーが体験して意見を言い改善につなげるなどの非常に実践的な内容になっている。

また9月の研修前期が終わった後の中間課題として、研修の成果を生かして自分の館の教育事業の課題を抽出し、その結果から新しくプログラムを作り、それを実際に実施して、参加者の反応を報告するという宿題がでる。共通のフォーマットに書きこまれたこの中間課題はその

まま報告書（写真2）として製本し、2月の後期の研修の際に配布される。50数館の工夫されたプログラムを全員で共有することができ、参加者にとって貴重な財産となっている。さらに後期の最初の研修プログラムは、この各館での新しいプログラムを議論の材料とし、参加者から相互に意見を聞く機会を作っている。

現在は9期の途中であるが、これまでおよそ500人に近い修了生を送りだした。そして各年度ごとにメールでのネットワークを作り、情報交流や研究会、あるいは年度をまたがって修了生の集まりが行われるなど、博物館教育について議論する輪が広がっている。日本の博物館職員の中では微々たる人数ではあるが、熱心な参加者が多く、府県の研修会や交流会などでも目立った発言をされる方が多いため、研修で使われた用語などによって、参加年度の異なる研修参加者同士はすぐにわかり、連絡を取り合うような例も増えている。

博物館を、より多くの利用者にとって意味のある場とするために、この研修を今後も発展的に継続するとともに、将来はこの研修が契機となって博物館教育を本格的に学ぶ場ができることを期待したい。なお、研修プログラムの詳細は文化庁のホームページをご覧いただきたい。



写真2 中間課題の報告書「提出課題集」



写真1 研修の講義の様子

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向け教育用地球学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
<http://www.tokyo-science.co.jp>
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science



■ 企画展・特別展

気候変動展が、ニューヨークで開催

2019年6月7日から10月27日まで、ニューヨークのガバナーズ島のノーラン公園（Nolan Park）で、地球の温暖化にともなう気候変動への積極的な行動を喚起した企画展が、ニューヨークの気候博物館の主催で開催された。同展は、江戸東京博物館のたてもの園や明治村に似た、ノーラン公園内に歴史的建造物として保存されたアメリカ沿岸警備隊の隊員宿舎のひとつを使って開催され、市民ひとりひとりが、自分のできる範囲で、現在進行している地球の温暖化に対して、その悪影響を可能な限り抑え込む行動を促すこと「Taking Action」を目的にしたものだった。展示は、公開されている歴史的建造物内の三つの部屋が展示室として使用され、ひとつの部屋では、二酸化炭素排出緩和の実証された戦略が紹介された。もうひとつの部屋では、二酸化炭素排出緩和方策の実施の妨げになっている要因の実例が紹介された。また残るもうひとつの部屋では、二酸化炭素排出緩和の具体的な成功例が紹介された。

Taking Action.

Climate Museum, New York.

<https://climatemuseum.org/takingaction>

<https://www.takingaction.nyc/exhibition>

キュリー夫人に続く女性科学者の偉業展が、米ノースカロライナ自然科学博物館で開催

2019年3月24日から、ノースカロライナ州ローリー（人口：47万人）にあるノースカロライナ自然科学博物館で、科学、技術、エンジニアリングや数学の世界で輝かしい業績を残した女性科学者を紹介した企画展が開催されている。同展では、革新的な業績を残したにも関わらず、「おんなだから」という理由で不当な扱いを受けた女性科学者40人の生い立ち、経歴と業績が紹介されている。

本展で紹介された科学者は、1960年代に環境問題を告発した、海洋生物学者レイチェル・カーソン（米ペンシルベニア州生まれ、1907～1964年、『沈黙の春』など）をはじめ、HIVを発見したウイルス研究者フランソワーズ・バレー＝シヌシ（パリ生まれ、1947年～）や、2014年に「リーマン面とそのモジュライ空間の力学と幾何学に関する顕著な業績」を理由にフィールズ賞を受賞した、イラン生まれの数学者マルヤム・ミールザーハーニー（1977～2017年）、軌道力学の計算でマーキュリー計画の緊急帰還軌道や月へのアポロ月面飛行船と司令船のラン

デブー軌道の計算を手がけたアフリカ系米国人の数学者キャサリン・ジョンソン（米ウェストヴァージニア州、1918年生まれ）、第二次世界大戦中はマンハッタン計画に参加してウラン燃料の濃縮手法の研究を行った、中国系米国人の放射線物理学者・呉健雄（江蘇省太倉市生まれ、1912～1997年）など41名（下記ウィキペディアのサイトを参照）。

主催者であるノースカロライナ自然科学博物館に確認したところ、さらに紹介する女性科学者は増やすことになっているようだ。会期終了時期は未定。

Beyond Curie.

North Carolina Museum of Natural Sciences, Raleigh, NC.

<https://naturalsciences.org/exhibits/featured-exhibitions/beyond-curie>

<https://naturalsciences.org/calendar/news/beyond-curie-exhibition-opens-at-n-c-museum-of-natural-sciences-march-24/>

<https://www.beyondcurie.com/>

https://en.wikipedia.org/wiki/Beyond_Curie

古代の海洋生物展が、米ウェスタン科学博物館で開催

2019年8月31日から、ロサンゼルス郊外のヘメット（人口：8.5万人）にあるウェスタン科学館（2006年設立）に古代の海に生息した生物を紹介した展覧会が開催されている。「古代の海の生物」と題した同展では、海をすみかとする三葉虫からクジラまで、ありとあらゆる生物の化石が紹介されている。展示される化石は、すべてかつて海だったヘメット周辺のリバーサイド郡の地層から発掘された。最も古いもので藻類の化石があり、また約1,800万年前から約150万年前（新生代第三紀中新世半ばから鮮新世）にかけて生息していたサメの一種であるカルカロクレス・メガロドンの歯の化石も展示品に加えられている。そのほかにサンノゼ郊外のマデラの地層から発掘されたマナティーの骨もはじめて公開されている。会期は2020年5月30日まで。

Life in the Ancient Seas.

Western Science Center, Hemet CA.

<https://www.westernsciencecenter.org/calendar/2019/8/31/life-in-the-ancient-seas-exhibit-opening>

<https://www.pe.com/2019/08/30/go-under-the-ancient-sea-with-new-exhibit-at-hemets-western-science-center>

<https://www.instagram.com/westernsciencecenter/>

古代海の怪物展が、シドニーの国立海事博物館で開催

2019年9月26日から、シドニー（人口：550万人）にあるオーストラリア国立海事博物館（1991年設立）で、古代の海に生息した肉食動物を紹介した展覧会が開催されている。「海のモンスター：先史時代の海のプレデター」と題した同展では、首長竜エラスモサウルスや、プロゲナトドンなどの海中で生活したトカゲなど、既に絶滅してしまった大型の肉食動物をレプリカや化石などで紹介している。監修：熱帯クイーンズランド博物館（クイーンズランド州立博物館機構のひとつ）の上席学芸員エブセン・クヌッセン博士。会期は、2020年4月27日まで。

会期中、館内の3D映像ホールで、米ナショナル・ジオグラフィックが制作した3D映画「Sea Monsters 3D – A Prehistoric Adventure」（上映時間：20分）が上映されている。

Sea Monsters - Prehistoric Ocean Predators.
Australian National Maritime Museum, Sydney.
<https://www.sea.museum/whats-on/exhibitions/sea-monsters>
<https://www.qm.qld.gov.au/Research/People/People/Profile/K/Espen+Knutsen#.XcmIFtVUuM8>
<https://www.sea.museum/whats-on/exhibitions/sea-monsters/scary-sea-monster-stories>
<https://www.sea.museum/2019/09/25/sea-monsters-qa-with-our-curious-kid-curators>
<https://www.sea.museum/2019/09/18/unearthing-paleontology-ten-questions-with-dr-espen-knutsen>
https://youtu.be/GlsNM_b9tXQ
<https://www.youtube.com/watch?v=B9aPB6KB504>
インフルエンザ展が、米デービッド・J・センサー医学博物館で開催

2020年5月26日から2021年2月5日まで、ジョージア州アトランタ（人口：450万人）にあるアメリカ疾病管理予防センター（CDC）のデービッド・J・センサー医学博物館で、インフルエンザを歴史的視点で紹介した展覧会が開催されることになっている。「インフルエンザ：複雑なウイルス／複雑な歴史」と題した同展では、20世紀から21世紀にかけて、国境を越えた地球規模のインフルエンザの感染のひろがり、各国におけるワクチンの開発、予防接種、広域流行への対策、予防の啓蒙活動が紹介されることになっている。また1946年の設立以降、アメリカ疾病管理予防センターが果たした役割も紹介されることになっている。

Influenza: Complex Virus/Complex History.
David J. Sencer CDC Museum
<https://www.cdc.gov/museum/upcoming.htm>
<https://savesocial.net/geo/299853850552024/>

ハッブル宇宙望遠鏡展が、米カリフォルニア航空宇宙博物館などで巡回

2019年10月1日から、カリフォルニア州サクラメント（人口：240万人）にあるカリフォルニア航空宇宙博物館で、ハッブル宇宙望遠鏡展が開催されている。同展は、アメリカ航空宇宙局（NASA）が企画制作した巡回展（アメリカ国内に限定）であり、1990年4月24日にNASAがスペースシャトル「ディスカバリー号」で打ち上げたハッブル宇宙望遠鏡の模型をはじめ、ハッブル宇宙望遠鏡開発の物語や、ハッブル宇宙望遠鏡が撮影した宇宙の画像が紹介されている。会期は、2020年3月31日まで。

2016年8月1日に巡回が始まった同展は、既にシカゴのアドラー天文博物館をはじめ、34館の博物館で開催された。カリフォルニア航空宇宙博物館での開催後は、ロサンゼルスウィルソン山天文台、エルパソ歴史博物館（テキサス州）とモービル歴史博物館（アラバマ州）に巡回する予定だ。

The Hubble Traveling Exhibit.
Aerospace Museum of California, McClellan, CA.
<https://aerospacemuseum.org/event/hubble-exhibit/>
<https://www.nasa.gov/content/the-hubble-traveling-exhibit>
<https://youtu.be/fh8j7-djAWc>

■ 常設展示

深海の展示が、独ゼンケンベルグ自然史博物館に登場

2020年3月に、フランクフルト（人口：77万人）にあるゼンケンベルグ自然史博物館に、深海の生物を紹介した新しい常設展示がオープンする。「深海」と題した同展では、ダイオウイカをはじめ、フクロウナギ、クモヒトデやムラサキカムリクラゲ、アンコウなど、まだ完全に解明されていない深海生物の生態が紹介されることになっている。

Tiefsee.
Senckenberg Naturmuseum, Frankfurt.
<https://museumfrankfurt.senckenberg.de/de/ausstellung/vorschau/tiefssee/>

化石ホールが、ワシントン国立自然史博物館でリニューアル・オープン

2019年6月19日に、ワシントン国立自然史博物館で、展示の全面更新が進められていた化石ホールが、「デービッド・H・コッホ化石ホール」としてオープンした。同展では、約700点の化石標本を使って生物の進化が紹介されている。展示面積：約2,900㎡。

The David H. Koch Hall of Fossils – Deep Time.
National Museum of Natural History, Washington, DC.
<https://naturalhistory.si.edu/exhibits/david-h-koch-hall-fossils-deep-time>

1月2月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
札幌市青少年科学館	地球のフシギを体感! Hawaii 展	1月5日～1月19日
釧路市こども遊学館	冬休みイベント2020「おいでよ!ものがたりの世界へ」	1月4日～1月19日
	ジオ・フェスティバル	1月12日
	とり+かえっこ	2月15日～2月16日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「人工衛星」	2019年10月5日～1月7日
	スペースパーク企画展「昭和レトロ展」	2019年12月7日～1月7日
	ホワイエ企画展「オーロラ写真展」	1月11日～4月5日
	展望ロビーパネル展「いのちってなに?」	2月1日～2月24日
産業技術総合研究所 地質標本館	地質標本館特別展「めくってみよう!大地の図鑑 -山口-」	1月7日～3月8日
栃木県立博物館	テーマ展「昭和天皇の生物学御研究」	2019年11月26日～1月19日
	テーマ展「おじいさんやおばあさんの子どもころの暮らし」	2019年12月14日～4月5日
	テーマ展「名所絵 -旅する絵画-」	1月11日～2月9日
	テーマ展「栃木の年中行事」	1月11日～2月9日
	テーマ展「あつまれ!自然好き -ポスター発表-」	2月1日～3月1日
	テーマ展「中世下野の歴史物語の世界 -「玉藻前草子」と幸若舞曲「信田」-」	2月22日～4月5日
	テーマ展「栃木の海と貝塚」	2月22日～4月5日
川口市立科学館	特設コーナー「自動運転のしくみ」	2月27日～3月22日
我孫子市鳥の博物館	第85回企画展「友の会展」	2019年12月7日～1月13日
	第86回企画展「バンディング展-足環でわかる鳥の渡り-」	2月1日～6月14日
鴨川シーワールド	特別展示「2020年子年の生き物～海の子(ネズミ)たち～」	2019年12月21日～1月31日
国立科学博物館	特別展「ミイラ ～『永遠の命』を求めて」	2019年11月2日～2月24日
	企画展「絵本でめぐる生命の旅」	2019年12月17日～3月1日
郵政博物館	年賀状展-令和さいしょの新年のごあいさつ-	1月1日～2月11日
	世界切手展	2月22日～4月5日
たばこと塩の博物館	たば塩コレクションに見る ポスター黄金時代	2019年12月14日～2月16日
多摩六都科学館	冬の特別イベント ROKUTO ROBOT PARK	2019年12月21日～1月4日
三菱みなとみらい技術館	企画展「スポーツを科学する～人間の能力はすごい!」	2019年11月1日～1月13日
はまぎんこども宇宙科学館	冬休み特別企画「プログラミングでライト・マジック!」	2019年12月21日～1月6日
世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ	アマゾンを超える水の楽園 ブラジル・パンタナール大湿原 ～第2章 残された森～	2019年12月14日～4月12日

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
岐阜かかみがはら航空宇宙博物館	企画展「研三 ～世界最速を目指して～（仮）」	2月5日～3月16日
ふじのくに地球環境史ミュージアム	企画展「大絶滅－地球環境の変遷と生物の栄枯盛衰－」	2019年11月30日～4月5日
	トピックス展「哺乳類化石の発掘10年史」	2019年12月10日～2月9日
静岡科学館 る・く・る	企画展「夜とくらやみの世界」	2019年12月21日～2月24日
東海大学海洋科学博物館・自然史博物館	干支（ねずみ）にちなんだ動物・植物	1月1日～1月13日
	化石クリーニング	1月1日～6日・11日～13日
	フォトコンテスト	1月15日～2月15日
名古屋市科学館	チームラボ★学ぶ！未来の遊園地と、花と共に生きる動物達	2019年11月30日～2月16日
滋賀県立琵琶湖博物館	トピック展 2020 干支展「ねずみ！子！ネズミ！！」	1月2日～1月19日
	ギャラリー展「トンボ100大作戦－滋賀のトンボを救え－」	1月19日～2月16日
キッズプラザ大阪	世界をつなぐ日本の“OSHOGATSU”2020	1月3日～1月5日
きしわだ自然資料館	特別展「タコの王国」	2019年11月26日～1月26日
神戸市立青少年科学館	冬の企画展「巨大迷路とうちゅうの旅」	2019年12月14日・15日・21日・22日・26日・27日・1月5日・6日・11日～13日・18日・19日・25日・26日
	第24回 鉄道模型とあそぼう	2月8日・9日・11日
阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	阪神・淡路大震災25年特別企画展	1月2日～5月（予定）
伊丹市昆虫館	企画展「伊丹の自然」	1月4日～4月6日
	プチ展示「アリ」	1月22日～4月6日
姫路科学館	企画展「はりまの星・日本の星」	2019年12月21日～1月19日
	作品展「第34回 未来を描く科学絵画展」	1月31日～2月24日
明石市立天文科学館	2020年全国カレンダー展	2019年12月14日～1月26日
	マンホール（地上の星）展	2月1日～4月5日
鳥取県立博物館	生誕100年 國領経郎展 －静寂なる砂の景－	1月25日～2月25日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「草地功地学標本コレクション展 その2」	1月5日～2月23日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別陳列「造られたいきもの」展	2月1日～4月5日
広島市江波山気象館	企画展「レッツ エンジョイ！サイエンスアトラクション」	1月25日～3月15日
防府市青少年科学館	パネル展「星のある風景」	1月25日～3月8日
愛媛県総合科学博物館	企画展「理科室の宝物～学校収蔵標本から地域の自然を再考する～」	2月22日～4月5日
	企画展「自然を記録しよう！標本のつくり方」	2月22日～4月5日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「小笠原騒動と白黒騒動－小倉藩小笠原家の御家騒動－」	2019年10月26日～2月16日
	歴史ばけっと企画展「変わるわたしたちの暮らし」	2019年10月26日～2月16日
	冬の特別展「コレクション大集合～モノが語る私たちの暮らしと自然～」	2019年12月21日～2月11日
北九州イノベーションギャラリー	磨き抜かれた職人の技～第2回「北九州技の達人」展	2月8日～3月22日

※次号（3月号）に掲載の3月4月の特別展情報は1月20日（月）までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号（3月号）に掲載のリニューアル情報は1月20日（月）までにお寄せください。

愛媛県総合科学博物館

〔更新箇所1〕 4階自然館 愛媛の自然「ゴミアシナガサシガメ」
「セアカゴケグモ」

〔更新内容〕 2019年6月に愛媛県新居浜市で約30年ぶりに発見され、博物館に寄贈されたゴミアシナガサシガメ。県内に数個体しかない貴重な実物標本を展示。また、近年注意が呼びかけられている毒グモ・セアカゴケグモの、博物館近郊で捕獲・駆除された個体を展示。

〔公開日〕 2019年9月13日



ゴミアシナガサシガメ



セアカゴケグモ

〔更新箇所2〕 3階科学技術館 素のコーナー「三並義忠の発明と技術」

〔更新内容〕 世界で初めて自動炊飯機構を発明した愛媛県新居浜市出身の三並義忠。発明の肝となる温度感应式スイッチや実験ノートなどの展示に加え、三並義忠の歩んだ人生が初めて明らかにされた展示。

〔公開日〕 2019年10月12日



三並義忠の発明と技術

〔更新箇所3〕 3階科学技術館 伝のコーナー「スーパーコンピュータ「京」」

〔更新内容〕 令和元年8月にシャットダウンしたスーパーコンピュータ「京」の実物筐体を公開。間近で見て「京」の構造を存分に堪能できる。基礎研究から産業分野まで「京」による研究成果も解説。

〔公開日〕 2019年11月22日



スーパーコンピュータ「京」

パナソニックだから、可能なソリューションがある。

映像からITシステムまで、パナソニックならではの技術力と商品力。多様化する現代のビジネスニーズに、トータルソリューションでお応えします。

Core Products

- Security
- Communication
- Office
- Infrastructure
- Terminal System
- AVC Network

Total Solution

- マーケティング・セールス
- システムインテグレーション
- 設置・施工
- 保守・メンテナンスサービス
- クラウド・運用サービス

パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社

お問い合わせ先 www.panasonic.com/jp/company/pssj.html

包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、『8K』の投射解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

イベント告知

第27回 日立サイエンスショーフェスティバル

令和2年2月8日～2月16日に日立シビックセンターで第27回日立サイエンスショーフェスティバルが開催されます。期間中は、科学を楽しめるイベントや工作コーナー、科学館職員によるサイエンスショーなどが実施されます。ぜひご参加してみたいはいかがでしょうか。

▶実施期間 令和2年2月8日(土)～2月15日(土)

- 天文講演会
- 実験道具大集合
- 工作コーナー ほか

令和2年2月16日(日)

- スペシャルサイエンスショー
- 工作・実験ブース

▶場 所 日立シビックセンター科学館

▶観 覧 料 2月16日(日)のみ科学館・天球劇場入館無料

▶主 催 公益財団法人日立市民科学文化財団

※詳細はホームページ(www.civic.jp)をご覧ください。



新規 巡回展示募集

加盟館園がお持ちの資料、あるいは新規に製作する企画展示等について

巡回展事業へのご提供をお願いいたします。

ご提供可能な展示がある場合、またご質問がありましたらメール等で事務局までご連絡ください。

みなさまからのご連絡お待ちしております。

※なお本事業は、所有される資料をお譲りいただくものではありません。

B|NOMURA
GROUP

世界に、歓びと感動を



株式会社 乃村工藝社

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

さまざまな時代の化石たち



岩手県立博物館の展示室の様子

岩手県は広大な面積と複雑な成り立ちから、全国随一とも言える地質学的多様性を誇っています。これに関連して、岩手県からは古生代シルル紀以降のすべての時代（紀）の化石が産出します。そのため当館ではこれらの時代の県内産化石を展示しており、中には日本で最古（デボン紀）のアンモナイト化石や日本で最初にみつかった恐竜化石「モシリユウ（複製）」なども含まれています。いつかさらに古い時代の化石まで展示できたらいいなと思っております。



予告 次回執筆者は、奥州市牛の博物館 森本 陽さんです。

令和元年度第2回理事会・総会および 第27回研究発表大会の開催

▶と き:令和2年2月13日(木)・14日(金) ▶ところ:オーテピア・高知みらい科学館

2月に令和元年度第2回理事会・総会を開催します。1日目の理事会・総会では、来年度の事業計画および予算案等を協議いただきます。お忙しいとは存じますが、みなさまのご参加をお願いいたします。

2日目には第27回研究発表大会を開催します。今回も多様な加盟館園からそれぞれの館で実践されている活動を発表していただく予定です。この機会を情報収集、情報発信の場として活用していただけますと幸いです。

それでは、高知でみなさまとお会いできることを楽しみにしております。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

井島 真知(ベルナール・ビュフェ美術館学芸員)
大島 光春(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部主任)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(主幹))
弘田 澄人(かわさき宙と緑の科学館天文担当係長)
濱田 浄人(国立科学博物館連携推進・学習センター
連携推進課長)

全科協事務局

国立科学博物館
連携推進・学習センター 連携推進課
(担当:南部・片波見・苫米地)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcs.jp
発行日 2020年1月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社